

二〇一四年度 東海大学付属高輪台高等学校中等部

国語問題 第一回

注 意

1. 開始の合図があるまで、この問題用紙を開かないこと。
2. この問題はページから十ページまである。よく確かめること。
3. 開始の合図があったら、受験番号・氏名を解答用紙に記入すること。
4. 試験時間は50分間である。
5. 終了の合図があったら問題用紙は机の右に、解答用紙は左にふせておくこと。

【国語】（第一回試験）（五〇分）（満点一〇〇点）

※文字は一画ずつ丁寧に書きなさい。

※解答に字数制限がある場合は、句読点なども一字として数えます。

— 1 —

鳥取県の国府町を流れるフクロ川。その川原を地元の人たちは、親しみをこめて「万葉川原」と呼んでいる。^{注1} A の編纂者と言われる大伴家持が、かつてこの地に国守として住んでいた。そのことに因む命名だ。

大伴家持は、生涯に二度、国守として地方へ赴任している。一度目は、意気盛んな二十代から三十代へかけて。越中の国府で、五年間を過ごした。政治家としては、ステップアップのための地方勤務だったようだ。

B なのが、二度目となった鳥取県、因幡の国への赴任だ。四十代で地方へ……。実はそのころ、彼の一族である大伴氏は、政治の上では危機的な状況にあった。つまり、大伴家持も地方へ飛ばされた、と考えていいだろう。今で言うなら、^{注2} 窓際族の地方転勤、という感じだろうか。

「万葉川原」を眺めながら、当時の家持の気持ちを思いやる。政治家としては、もう出世は望めないだろう。だったら自分は、何をなすべきだろうか……？

この地で初めて迎えた正月に、家持が作った歌が歌碑になっている。万葉川原から歩いて数分、大きな木の木の下に、すうりとした自然石の碑。

あらた
新しき年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事

新しい年の初めである初春の今日降る雪のように、吉事よ、C。

まさに新年にふさわしい、おめでたい一首である。静かに歌いおこし、^{注3} 結句に向かつてクレッシェンドで盛り上がりつついく感じが、降りつもる雪と重ねあわされて効果的だ。年賀状に添えたら、ばっちり決まりそうだなあと思う。そのころの下降ぎみのキョウ遇を考えると、祈りのようにもとえられる歌だが、私はさらに積極的に、家持の精神の強さのようなものを、読みとりたと思った。それほど、^{注4} はつらつとした印象がある。

そしてふと見ると、隣にもう一つ、寄り添うようにして歌碑が建っていた。佐佐木信綱が、この地を訪れたときに詠んだ歌のこと。これは知らなかった。

降る雪のいやしけ吉事ここにきて歌ひあげけむことほぎの歌

『万葉集』の大変な研究家でもあった信綱の感慨が、素直に歌われている。実は私の師である佐佐木幸綱先生は、信綱のマゴにあたる歌人だ。

大伴家持が住み、佐佐木信綱が訪れた場所に、今自分が立っている。それはちょうど、短歌という自分の関係を、象徴している情景のようにも思われた。大伴家持が取り組み、佐佐木信綱が情熱を傾けた五七五七七という詩のかたち。時を越えて、まったく同じものに、^{注5} 自分は今向き合っているのだ。歌碑を離れて、またしばらく歩くと、国府跡というのがある。水田整理のために前調査をしたところ、遺構が出てきたのだそうだ。

「ここが正殿のあったところで、主に儀式が行われておりました。こちらが後殿といまして、大伴家持はここで事務的なことをしていたものと思われます。で、あちらが南門で、大きな柱がこう立っており……」地元のかたに丁寧に説明していただいたが、「跡」はあくまで跡なわけで、当時の建物の様子などは、想像してみるほかはない。歴史にさほど詳しくない私には、どうもぴんとこなかった。

その点、言葉というのはすごいなあと、改めて思う。千年たっても、傷んだり腐ったり消えたりすることがない。今私が大伴家持の歌を口ずさめば、かつてと同じ鮮度で、その歌は現在に蘇るのである。

ところで、さきほどの「いやしけ吉事」の歌以降、家持の歌は残っていない。単に残っていないだけなのか、作られなかったのかは、学問的には不明だ。

私自身は、^{注6} 作らなかったのではないかと思っている。「いやしけ吉事」の歌は『万葉集』の最後に据えられた一首だ（巻二十・翌六）。最後を飾るにふさわしい歌を得たところで、彼は歌集編纂というプロデューサー的な仕事に専念することを選んだのではないだろうか。

政治的な不遇が、^{注7} そういう文学の大きな仕事へと、彼を駆り立てていったということは、充分考えられる。そして、これは経験から言うのだけれど、歌を作るのと歌集を作るのでは、全然違う目が必要とされる。歌集をまとめるためには、かなり冷めた目を持つことが大切だ。自分の一冊の歌集をまとめるだけでも、歌を創作するほうのエネルギーは、かなり吸いとられたことを思い出す。まして『万葉集』のような、膨大な作品をまとめあげるためには、^{注8} そちらにエネルギーを集中する必要があるだろう。

「いやしけ吉事」の言葉には、これから編まれるはずの素晴らしい歌集への思いも、こめられていたかもしれない。

（俵万智「言葉の虫めがね」）

注1……材料を集めて本にまとめること。

注2……現在の富山県

問一——線部ア、オのカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

問二 A に入る最も適切な語を、文章中から書き抜きなさい。

問三 B に入る語として、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 対象的 2 対照的 3 対称的 4 大將的

問四 — 線部 1「因幡の国への赴任だ」は今から約何年前ですか。最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 約二千年前
- 2 約千二百年前
- 3 約八百年前
- 4 約五百年前

問五 — C に入る内容として、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 私の気持ちをいやしておくれ……
- 2 少しずつ降り積もっておくれ……
- 3 雪のように白くなっておくれ……
- 4 いよいよ増えていっておくれ……

問六 — 線部 2「そのころ」の内容として、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 越中の国に赴任したころ。
- 2 因幡の国に赴任したころ。
- 3 初春なのに雪が降るころ。
- 4 新年にふさわしいころ。

問七 — 線部 3「はつらつとした印象がある」の説明として、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 吉事を願うだけではなく、積極的に前向きに生きようとする気持ちのこもった歌であると考えている。
- 2 家持の下降気味の境遇に思いが及び、新年に期待しなくてはならない歌人に同情している。
- 3 新春にふさわしく、年賀状に添えたらばつちり決まるこの歌に、人生の無常を感じている。
- 4 降り積もる雪と新年の祈りのなかで、芽吹き春の力強さに力点を注いだところに感動している。

問八 — 線部 4「自分」の職業として、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 小説家
- 2 詩人
- 3 歌人
- 4 俳人

問九 — 線部 5「作らなかつたのではないか」と考えた理由として、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 『万葉集』編纂の仕事にのみ、全力を尽くしたいと考えていたから。
- 2 「いや重け吉事」の歌を大切に、それ以外には興味がなかったから。
- 3 政治的不遇により、歌人としての成功をあきらめざるを得なかったから。
- 4 『万葉集』の編纂に、最もおめでたい一首を創作することができたから。

問十 — 線部 6「そういう文学の大きな仕事」とは何ですか。文章中の言葉を使って八字で答えなさい。

問十一 — 線部 7「そちら」の内容として、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 歌集を編纂すること。
- 2 『万葉集』の歌を作ること。
- 3 自分の歌集をまとめること。
- 4 さめた目を持つこと。

問十二 — 線部 8「編まれる」と同じ意味の語を、文章中から六字で書き抜きなさい。

問十三 この文章の内容として、正しいものには1、誤っているものには2を、それぞれ解答らんに入力しなさい。

- 1 『万葉集』を編纂した佐佐木信綱は、『万葉集』の大変な研究家でもある。
- 2 この文章を書いた作者は女性であり、佐佐木幸綱の教え子でもある。
- 3 作者は「いや重け吉事」の歌は、大伴家持の最後の歌だと思っている。
- 4 文章中の歌には、積雪の多い地方の春を待ち焦がれる気持ちが描かれている。

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

まぶしい。それが榊先輩だ。生き生きと走る姿も、みんなに声をかける姿もそうだ。見た目がいいものもある。少し茶色がかった涼しげな目に、きゅつと口角が上がった口。笑っていてもはしゃいでいても、榊先輩はいつも凛として^{リッ}いる。でも、何より榊先輩がキラキラして見えるのは、誰に対しても何に対してもきちんと向かうからだ。榊先輩は威張ったりびびったりしないし、慌てたり怒ったりしない。いつも優しく朗らかだった。

だけど、最近、そんな榊先輩に陰りが出てきた。不調なのだ。榊先輩は夏休みに入ったあたりから調子を崩していた。単純な野外走ですら、後半になると身体が重くなる。3キロ九分台をキープしてはいるけど、それはただイジ^イするだけの走りで、勢いもパワーもない。榊先輩らしい抜けるようなすかつとした走り。それをしばらく見ていない。

スポーツには故障はつきものだし、伸び悩む時期もある。現に設楽先輩も三年生になって記録が落ちていく。でも、それは何とかなる種類のものだというのが僕でもわかった。設楽先輩は今ある小さなハードルさえ越えれば、いつもの走りができる。^イ榊先輩は違う。力が感じられないのだ。^ロ、そのせいか、榊先輩はほんのわずかだけれど、いつもと違う空気を漏らすようになっていた。

今まで榊先輩はどんなに練習がハードな時でも、苦しそうな顔すらしなかった。顧問が上原先生に変わった直後だって、誰より愕然^{がくぜん}としたはずなのに、部長として僕たちを盛り上げていた。それなのに、最近はお考え^{おんがえ}こんだり、不安そうにしたりする姿を見せることもあった。^ハ榊先輩はそれに誰かが気付く前に、にこやかに笑って見せる。けれど、そのふとした瞬間が僕には^三気になってしかたがなかった。

そんな中、駅伝練習が始まって最初の本格的な記録会に行くことになった。僕は一年生の時から、大会でも練習会でも外へ行くのは好きだった。自分自身を試せる機会だというのもあるけど、榊先輩の走りを広い場で見るのは気持ちよかった。榊先輩の走りは、大きな競技場だと一段とハ^ッえる。でも、今回は気が重かった。榊先輩の調子の悪さが、記録として現れてしまうかもしれない。そう思うと、落ち着かなかった。

榊先輩が出る一組目のレースを、二組にエントリーした僕と設楽先輩は、並んで見つめた。一組の選手は、足や腕の筋肉の付き方からして違う。無駄のないしなやかな身体。3キロを九分台前半で軽く走る選手たちだ。

レースは静かに始まった。みんな走りなれているから、無駄に飛ばしたりはしない。スピードだけでなく冷静さがある。スタート直後は、榊先輩も先頭集団の中ほどにつけて走っていた。ここまではいつもの榊先輩だ。

しかし、2キロ地点を通過し、みんなが速度を上げ始めると同時に、榊先輩は先頭集団からこぼれはじめた。ほかの選手のようにスパートをかけることができないのだ。榊先輩は走った分だけ、消耗している。新たな力がわいていない。みんなが勢いよく進んでいく中で、榊先輩は第二集団の後ろまで追いやられた。

本来の榊先輩には突き出てくるような力があるのに、今日の前を走る榊先輩は足も腕も重い。何度も勢いをつけようと身体をゆすつてはいるけど、切りかわ^エらない。榊先輩の身体はただ足を進めることだけめい^エいばいだ。どれだけ走っても疲れないのだろうかと僕を驚かせていた榊先輩はいない。

「あともう少しだよ、上げていこう！」

僕は必死で叫んだ。設楽先輩も「榊、ここから」といつもより鋭い声を張り上げている。

けれども、榊先輩のスピードは最後まで上がらなかった。振り絞^オろうとしたって、榊先輩の身体には何も残っていないのだ。ゴールした時には、十二位。三位以内に入らない榊先輩を見たのは初めてだった。

「大丈夫ですか？」

僕はゴール地点に駆けよった。

「ああ、平気」

榊先輩はタオルで汗をぬぐいながら答えた。

「調子悪かったですね」

僕はできるだけ軽く響くように慎重に言葉を発した。

「ああ、そうだな」

榊先輩の息はいつもより上がっている。榊先輩はいったいどんな気持ちで結果を受け止めているのだろうか。何か言わなくては。でも、励ますのは違ってるしアドバイスなんてできるわけがない。何を言おうか迷っている僕に、榊先輩は、

「悪いな。うまく走れなくて」

と、申し訳⁹なさそうな笑みを^一。その頼りなげな顔に、僕は胸がかきむしられるように苦しくなった。

榊先輩は僕の^二だ。自信に満ちて輝いていて、そばにいてだけで僕までがいい気分になった。だけど、今の榊先輩は違う。いつも僕のずっと先を走っていた榊先輩が、僕と同じ場所にいる。それに失望しているわけじゃない。ただ、その榊先輩に、僕の心はどうしようもなく揺らされていた。

「次、俊介だろ？ がんばれよ」

わけのわからない感情がわいてくるのに戸惑っている僕に、榊先輩が言った。榊先輩はもういつものすつきりした顔をしている。

今僕がすべきことは走ることだ。今まで以上に速くならなくてはいけない。榊先輩が本調子でないならなおさらだ。本来の榊先輩にかなうぐらいの走りをしなくては。

「行ってきます」

僕は出発地点へと急いだ。

(瀬尾まいこ「あと少し、もう少し」)

問一——線部ア、オのカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

問二——線部1「榊先輩らしい抜けるようなすかつとした走り」に使われている表現技法を二つ書きなさい。

問三——イ、ハに入る語として、最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

- 1 そして 2 だから 3 しかし 4 もちろん 5 そのうえ

問四——線部2「いつもと違う空気」とは具体的にどのようなことですか。文章中から二十字以内で書きなさい。

問五——線部3「気になってしかたがなかった」とありますが、何が気になるのですか。最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 気付かれる前にこやかに笑って見せる気配り。
2 こやかに笑って見せる直前の不安な陰り。
3 こやかな笑顔に隠された苦しそうな表情。
4 こやかに笑って見せる瞬間の迷いのなさ。

問六——線部4「先頭集団からこぼれはじめた」とはどのような様子ですか。次の中から最も適切なものを選び、番号で答えなさい。

- 1 先頭集団から急に引き離され、脱落する様子。
2 先頭集団から、少しずつ引き離されていく様子。
3 先頭集団のスピードをかわしつつ、横にそれていく様子。
4 先頭集団から一人二人と抜け出していく様子。

問七——線部5「いつもより鋭い声を張り上げている」とありますが、それはなぜですか。次の中から最も適切なものを選び、番号で答えなさい。

- 1 榊先輩の不調が明らかだったから。
2 いつもにまして重要な大会だったから。
3 ベストメンバーでの出場ではないから。
4 自分よりも、ほかの人の頑張りに期待したいから。

— 7 —

問八——線部6「できるだけ軽く響くように慎重に言葉を発した」とありますが、それはなぜですか。次の中から最も適切なものを選び、番号で答えなさい。

- 1 本気で走ってはいないことが十分わかっていたから。
2 今回の結果は本選には全く関係がないことを知っていたから。
3 納得のいかない結果に傷ついている本人を追い詰めたため。
4 不調を承知の参加であることをあらかじめ知っていたから。

問九——線部7「何か言わなくては」と思った理由として、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 失敗し落ち込んだ気持ちを引き立てたいと思ったから。
2 予想外の結果で気まずくなった雰囲気、いたたまれなかったから。
3 失敗を認めようとしなくて、それを悟らせたいと思ったから。
4 結果を知った仲間からの非難を、かわそうと思ったから。

問十——線部8「励ますのは違ってるしアドバイスなんてできるわけがない」と思ったのはなぜですか。次の中から最も適切なものを選び、番号で答えなさい。

- 1 先輩の不調が単純なものではないことは分かっていたから。
2 励ましやアドバイスで変わる状況ではないから。
3 失敗した人を励ますのは傷つけることにつながるから。
4 自分よりもすべてにおいて勝る、先輩に対する遠慮のため。

問十一——傍線部9「申し訳なさそうな笑み」とあるが、その心情説明として、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 後輩に気を遣わせてしまっていることへの罪悪感。
2 期待された結果を出せなかったことへの開き直り。
3 予想に反して失敗したことに対する照れ隠し。
4 自分の失敗を後輩に気遣わせまいとする思いやり。

問十二——1に入る語として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 見せた 2 乗せた 3 浮かべた 4 描いた

問十三——2に入るべき語を、ひらがな四文字で書きなさい。

— 8 —

問十四 — 線部 10「いつも僕のずっと先を走っていた榊井先輩が、僕と同じ場所にいる」とは具体的にどのようなことですか。次の中から最も適切なものを選び、番号で答えなさい。

- 1 自分を上回る存在であった先輩にも弱さがあることを知り、自分と変わらない人間であることを知ったこと。
- 2 一緒に走ると先輩はいつも自分の先を走っていたけれど、今回は自分と同じ速さで走ってくれていること。
- 3 今まで別々の大会にしか出られなかった先輩が、不調のため自分と同じ大会に出場したこと。
- 4 いつも自分より速いタイムで走っていた先輩が、不調のため自分と同じタイムになったこと。

問十五 — 線部 11「わけのわからない感情」の説明として、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 期待外れの結果であったため、かえって先輩に対する親しみがわいたこと。
- 2 期待はずれの結果にもかかわらず、自分は平常心でいられたこと。
- 3 先輩に対して、失望するどころか、ますます気になって仕方がないこと。
- 4 先輩に対して、失望してよいのか、親しみを感じていいのか迷っていること。

— 9 —

三

次の問いに答えなさい。

問一 — 線部 1～5の中で、他のものと比べて性質が異なっているものを一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「廊下を走らないのよ。」と何度も先生に注意された。
- 2 ルールを作っても、守らなければ意味がない。
- 3 その子は眠いのか、何も食べたがらない。
- 4 知らない人に、親切にもらった。
- 5 こんな大変な仕事を、彼一人に任せられない。

問二 1～5の敬語の使い方として、誤っているものを一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 このかさをお使いになりますか。
- 2 この本は明日ならお貸しできます。
- 3 先生は職員室にいらっしゃいますか。
- 4 お客様にはお茶をご用意しております。
- 5 お名前は何と申されますか。

問三 1～5の慣用句の使い方として、誤っているものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 忠告というのは耳が痛いものだ。
- 2 僕は弟よりも鼻が高い。
- 3 夏休みの前に胸をおどらせるのは小学生だ。
- 4 来週から転校生が来ると小耳にはさんだ。
- 5 腹を割って話した結果、仲直りができた。

問四 — 線部 ア・イの漢字として正しいものを、1～5の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

とても誠実な青年でコウカン^アが持てる。 リンゴとみかんをコウカン^イしよう。

- 1 交換
- 2 交歓
- 3 好感
- 4 公刊
- 5 高官

